

胸突き八丁の成瀬仁蔵

— 帰国から日本女子大学校創設まで —

片桐芳雄*

Naruse Jinzo at the most difficult period:
From returning home to the foundation of Japan Women's University

Katagiri Yoshio

0. はじめに

1894年1月の帰国から1901年4月の日本女子大学校創設までの7年余は、成瀬仁蔵にとって、まさに胸突き八丁の、苦しい坂道の連続だった。その7年余を、①既存の女学校の大学化や新たな女子大学創設を模索した時期、②大学創設活動の開始後種々の困難に突き当たって、諦めかけたこともあった時期、③その困難を乗り越えて女子大学創設にたどり着いた時期の、3期に分けて検証する。成瀬仁蔵が、女子高等教育にかけた不屈の熱意の跡をたどってみたい。



成瀬仁蔵、妻万寿枝（左隣）と
服部他之助一家・1895～6年頃
（『著作集』第1巻「口絵」）

1. 帰国後の模索

1-1. 成瀬仁蔵を待ち受けたもの

帰国

1893年12月22日⁽¹⁾、サンフランシスコを出港した成瀬仁蔵は、1月に⁽²⁾、横浜港に到着し、とりあえず、留守中の妻が身を寄せていた京都の義弟・服部他之助のもとに落ち着いた。彼は、母校同志社普通学校の教師をしていたのであった⁽³⁾。

ちょうど3年間の留学生活だった。

京都には、もう一人重要な人物が住んでいた。麻生正蔵である。92年1月に新潟の北越学館を辞任して梅花女学校教頭となった麻生は、同年9月に、服部他之助と同じく、母校同志社普通学校に勤めるようになった。成瀬と麻生は新潟時代に親しく交流した。米国留学中の成瀬から、帰国後女子大学を創

立したいから賛同協力してほしいとの手紙を受け取ったと言う⁽⁴⁾。

麻生は、次のように述べている。

「君が明治二十七年一月、帰朝するや、直ちに私を京都に來訪し、女子大学創設の意志を述べ、その準備の一法として女子教育に関する意見を一書に纏めて公刊する可否を相談せられ、私は両手を挙げて、之を賛成した。⁽⁵⁾」

しかし成瀬自身の回想によれば、成瀬は帰国早々「強キインフルエンザニ罹ッテ病床ニ苦シンデ四日間休ンデ居リマシタ」と言う⁽⁶⁾。

成瀬は、女子大学創設への強い決意のみを持って、貧窮と疲労とともに帰国したのだった。

梅花女学校校長に就任

女子大学の創設は簡単なことではない。その具体的方法を思案している成瀬に、梅花女学校校長就任

* 日本女子大学名誉教授

の要請がもたらされた。梅花女学校は、若き成瀬に、女子教育への使命を自覚めさせた学校であった。成瀬は、逡巡の上、この要請を受け入れた⁽⁷⁾。

3月8日、校長就任式が行われた。生徒総代・本多たかは「嗚呼斯る校長こそ我党の翹望^{きょうぼう}に堪へざる処なり」（ルビ・片桐）と歓迎の辞を述べた⁽⁸⁾。

4月6日と7日、梅花女学校で、関西を中心としたキリスト教系女学校の教職員が集い、教育課題を討議する関西女子教育会が開かれた⁽⁹⁾。討論議題には、徳育、知育、体育から学校運営に至るまで、女子教育全般に関する30の議題が取り上げられた。

梅花女学校は、会場校として、校長成瀬のほか最多の10名がこれに出席し、「聖書教授の方法」「作文の件」「習字の件」「女子体育の件」と題する報告を行った。成瀬は、女子の体育について講話した⁽¹⁰⁾。

討論議題のなかには、同志社女学校から提起された「基督教主義女学校普通科課表編成の件」もあった。これに関しては、満場一致で、教育課程モデル編成の検討委員会結成が決まり、成瀬は、5人の委員の一人に選ばれた。

この議題に対して、明治女学校校長で、『女学雑誌』を主宰する巖本善治は意見書を提出し、「苟くも普通教育を旨とせば、基督教主義なりとて殊更ら学課表編成に特別の箇条あるまじ。要は普通教育の学理に拠るのみ。たゞ徳育及び管理の精神を基督教主義とし、教師が言行の導化を基督教主義となすの外、別に異事あらん筈なし」と述べた⁽¹¹⁾。要するに、教育の内容とキリスト教の精神を切り離すことを主張したのであった。

このような主張は、成瀬自身、新潟女学校校長時代以後、徐々に考え始めたことではあった。しかし帰国した日本において、キリスト教教育のあり方を議論する場で、公然と主張されていることに、感慨を抱いたことであろう⁽¹²⁾。

さらに成瀬は、同年8月30日から9月7日まで、横浜のフェリス女学校で開かれた全国規模の第2回女子夏季学校に、巖本善治の要請で参加した。東京の青山英和女学校での開催予定が、震災のため急遽、フェリス女学校で開かれたのだった。ここには120名あまりの女生徒が参加したが、8月31日と9月1日に、成瀬は、矢島楯子や植村正久らとともに講師を務めた⁽¹³⁾。

第3回は関西で開くことになった。巖本は、その

開催計画を成瀬に依頼する手紙を出したが、結局、第3回夏季学校は中止となった⁽¹⁴⁾。

このように成瀬は、キリスト教教育界で積極的な活動をするとともに、その一方で、女子大学創設の具体的方法についても模索し始めた。

1-2. 梅花女学校改革—大学化を念頭に上京

梅花女学校の校長になって間もなくの4月、成瀬は、同郷の親しい先輩で大阪府知事を務める内海忠勝を訪問して、女子大学創設について相談し⁽¹⁵⁾、5月に上京することにした。

上京の第一の目的は、内海の紹介を得て総理大臣伊藤博文に面会することであったと思われる。伊藤を良く知る内海は、女子大学創設について、まず、成瀬を伊藤に引き合わせることを重要だと考えたのであろう。

自らの夢を語る同郷の後輩に対して、伊藤の態度は、偉ぶることもなく、率直で好意的だった。成瀬は「日記」に、その印象を「政事家風」と記し、番茶が二度出て来たことや「又來ル可シ」と語ったと書き残した⁽¹⁶⁾。成瀬は伊藤に対して好感を得た。また伊藤は成瀬に、学校の設立場所については「大阪ヲヨシトス」と語ったという⁽¹⁷⁾。

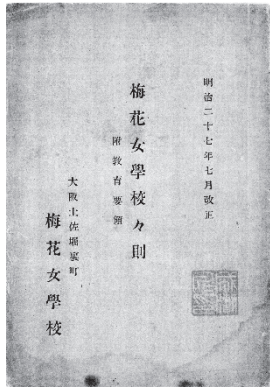
成瀬はこの上京時に、明治女学校をはじめ、女子学院、女子高等師範学校、明治学院、頌栄女学校、華族女学校、立教女学校、東京女学校、慶應義塾、正則中学校、美術学校、音楽学校などを視察し⁽¹⁸⁾、また井上毅文部大臣⁽¹⁹⁾や文部省高官、さらには福沢諭吉を訪問した。

「日記」によれば福沢は、「西洋人ガ日本女子ヲ教育スルトイフヲ笑ヘリ」「日本ニも女権あり」「人ヲ善クスルヲハ教育デハ出来ヌ」「私立ニ教育ハ任スル」「文部省で世話スルハ教育ヲ馬鹿ニシテ居ル」など、率直に私見を語った⁽²⁰⁾。成瀬は共感と戸惑いを合わせながら、これを聞いたことであろう。

ともあれ1894年5月の上京は、成瀬にとって貴重な経験となった。また、これまで関西を中心に活動してきた成瀬にとって、東京を知る良い機会ともなった。

学校改革

成瀬は、このように、女子大学創設の可能性を探るとともに、その一方で梅花女学校校長として、積



「梅花女学校々則・附教育要領」
(成瀬記念館所蔵)

極的に学校改革に乗り出した。

「梅花女学校に校長成瀬仁蔵氏就任以来、職員生徒皆々大に喜び居られ、諸事着々整備の運に赴き、学課の如きも、已に改良を加へ、又新設したる者もあり、尚来る九月よりは、一層の改良進歩を謀らるゝ由」(句点・片桐)と『基督教新聞』第568号(1894年6月15日)は報じた⁽²¹⁾。

上引に言う9月からの改革の詳細は、同年7月に梅花女学校が発行した「梅花女学校々則・附教育要領」という文書に示されている⁽²²⁾。

冒頭に附された「本校教育の要領」はその「目的」に次のように記した。

「本校ハ、生徒の心身全部を強健にし、殊に其淑徳を全備ならしめん為め、全体一致諸部統一の女子教育を施行し、以て日本帝国臣民の基礎たるべき貞良の婦女を養成するを以て目的とす。故に本校の教育ハ、独り智育のみならず、心霊の諸官能を平等に発育せしむるを以て主要とし、又開発主義に則り、暗記若くハ注入に偏する教授を避る^の而已ならず、観察理会及び創作の力を養ふに注意し、且は手業を以て体育を助け、兼て実用技芸に習はしむ」(句点、ルビ・片桐)

全体に、成瀬仁蔵の、新潟女学校での経験と米国留学の成果が生かされている内容だが、特に重要なのは、後段の「故に」以下であろう。心霊の諸官能の平等発育、暗記注入を排する開発主義、観察力や創作力の養成と「手業」重視などは、アメリカ留学で成瀬が確信した教育方針であった。

これらの原則の下に、読書では「鸚鵡^{おうむ}的暗誦の弊

を矯め意義を解するに重きを置き」(ルビ・片桐)、数学では「暗記注入の弊を避け専ら生徒の思想を精確緻密ならしむるの習慣を養ひ理会力を練るを目的とす」、英語は「成るべく直訳を避け字義文意に通熟するを期し」などの方法が示された。

専門科の設置

そして梅花女学校の大学化を模索する成瀬にとって特に注目すべきは、修業年限4年の普通科の上に、「家政部」「教育学部」「文学部」「音楽部」の四つの専門科を置いたことであろう。これは、のちに出版した『女子教育』に示される大学構想の基礎となったのである⁽²³⁾。

専門科の目的は、「他日家庭の賢母たり良妻たり婦人界良教師⁽²⁴⁾の先導者たるべく社会の改良家持た慈善家たるべき人を養成せんことを期す」(ルビ・片桐)と規定され、その教育方針は「独立研究の実力を得せしむるに在り、故に専ら観察経験読書及び実習等に因り自家の研究を奨励し、之を補ふに教師の講義及び誘導を以す」とある。賢母良妻に限らず、女性界・教育界の先導者、社会の改良家・慈善家の養成を目的として、教育方針において、教師の講義や誘導以上に、生徒自身の「自家の研究」を奨励したことは重要である。

この方針のもとに専門科は、修業年限を定めず、「一定の学識経験及び能力を得、前途独立独歩其業に耐へ又後進者を導くの地位に達すれば、則之を卒業の期となし、全科卒業の試験を行ひ卒業証書を授与す」(以上句点・片桐)とした。生徒の主体性を重んじた、まことに野心的な構想であった。

女子大学設立を志す成瀬にとって、梅花女学校を基盤に大学を設立することは、選択肢の一つであった。この校則改正には、その意図がはっきりと読み取れる。

「成瀬仁蔵君大坂梅花女学校に來りてより校内勃然として生氣あり。」と『女学雑誌』第404号(1894年11月25日)は記した。

校内文芸誌『この花』が創刊され、体育の授業を改善した。アメリカで、考案者ルーサー・ギューリックから学んだバスケットボールを、改良して取り入れた⁽²⁵⁾。女子体育の改革は、先の関西女子教育会の講話にも見るように、成瀬が強い関心を持った課題であった。

しかし、梅花女学校を基盤に大学を設立するとい

う成瀬の構想は、壁にぶつかった。その方法があまりに性急だったのである。

専門科に卒業生や上級生の有志者を集めようとしたが、それでは不十分と考えた。そこで、4年制の普通科を5年制に延長することにし、最終学年の生徒にもう1年学校に留まるように申し渡した。このような強引なやり方は、生徒たちの猛反発を招き、生徒たちは同盟休校した。その先頭に立ったのは澤山保羅の長女伊佐であった。学校の経営組織である大阪教育社社員との関係も悪化した。彼らは、キリスト教主義学校としての伝統を守ろうとしたのだった⁽²⁶⁾。

結局成瀬は、梅花女学校とは別に、新たな女子大学を設置することを考え始めた。

2. 始動・高揚、そして停滞

2-1. 新たな女子大学の創設へ

「大阪人士に訴ふ」

成瀬はまず麻生正蔵の協力を得て、女子大学創設の趣旨書を作成した。さらに成瀬はこの趣旨書に添えて、大阪人のみに配布する文書の起草を、その要点を示して、麻生に依頼した。それは、女子大学を「大阪へ置くの理由及大阪人士の此挙を賛翼すべき道理」を記すものであった⁽²⁷⁾。「日本女子大学設立に就て大阪人士に訴ふ」という文書がこれであったと思われるが⁽²⁸⁾、東京や京都ではなく大阪に女子大学を設立する必要を力説したのだった。

「見ずや東京には帝国大学等の有るあり、京都には特に明後年を期して京都大学の設立を見んとするあるも、独り我大阪に於て未だ精神的文化の中心備はらざるは是吾人の遺憾に堪へざる所にして諸君の大いに厝しいざきよとせられざる所なり。(中略)吾人乃素志又日本女子大学校の創設、帝国に於ける精神的文化の中心の一を造らんとするにあり、豈他意あらむや。⁽²⁹⁾」(ルビ・片桐)。

教育や文化の中心を、東京や京都に限ることはない。大阪は成瀬にとって何かと関係の深い土地であり、おまけに成瀬が最初に相談した旧知の内海忠勝は、かつて兵庫県知事を務め、いま大阪府知事であった。これは、前年5月の面談での、伊藤博文の発言を踏まえたものでもあったであろう。

『女子教育』の出版

同時に成瀬は、先述したように、帰国直後から麻生にその意を示していた女子教育に関する著作に取りかかった。麻生は、その間の事情を次のように述べている。

「明治二十八年の初春から、愈々これに着手し、特に同年の京都の熱夏全休業中を利用し、私の暑苦しい寓居に於て、著述事業に専心協力するに至つたのである。勿論その内容の骨子は君が多年の経験と在米研究との結果を提供して出来たものであるが、その執筆者は私であつて、その章項の配置(マ)安排から、内容の取捨、充実、正誤等は凡て主として私の分担責任である。⁽³⁰⁾」

こうして、麻生の全面的な協力を得て、『女子教育』の原稿が出来上がった。しかしそれは、麻生が言うように、また本誌前号の拙論で詳述したように、「内容の骨子」は、成瀬の米国留学の成果に基づくものであり、成瀬の米国留学研究報告書といべきものであった。

出版は、『女学雑誌』を主宰して出版事情に明るい巖本善治から、手広く教育関係書を出版する東京の普及舎を勧められたが、結局、大阪を拠点に、東の博文館と並ぶ代表的総合出版社であった青木高山堂から1896年2月に出版することになった⁽³¹⁾。

題辞は、女子教育に理解があり前年10月に伊藤博文内閣の文部大臣に就任した西園寺公望が「恒徳」と書き、序文は華族女学校長細川潤次郎が書いた。

注19に記したように、成瀬と西園寺との初対面はいつであったかは不明のところがあるが、伊藤の



西園寺公望・1903年7月
 (『西園寺公望傳』第2巻「口絵」)

腹心として頭角を現しつつあった西園寺は、外交官としてパリを中心にヨーロッパ生活が長く、世界の事情に通暁して、女子教育にも理解が深かった。世界の大勢を知る西園寺は、日本の古典を中心とする国文学よりも英語科を重視すべきと主張し、さらに「文明国に在てハ女子教育必ず旺盛に、女子教育旺盛なる国ハ又文明国と言ふが如き実勢なり⁽³²⁾」(句点・片桐)と述べる人でもあった。

女子高等師範学校長を経て華族女学校長に就任した細川も、「女子の教育の実際国力に其関係あり」と、生徒に向って語りかけた⁽³³⁾。彼は、『女子教育』に寄せた序文でも「余曾歴観海外諸国。其善教女者。国多富強。不善教女者。国多貧弱。(私はかつて海外諸国を歴観したが、優れた女子教育を行っている国に富強の国多く、そうでない国は貧弱の国が多かった・拙訳)」と記した。

日清戦争(1894.7～1895.3)後、国家富強と教育、とりわけ女子教育の重要性を主張する新たな女子教育論が、現実味を帯びて展開されるようになるが、細川の議論は、その先鞭をつけたものとして評価される⁽³⁴⁾。このような女子教育論は、成瀬がアメリカで学んだ「共和国の母」論の日本版とも言えた⁽³⁵⁾。成瀬の女子大学設立運動は、西園寺や細川のように、日清戦争に勝利した日本が西洋諸国に伍してさらに発展するためには、それにふさわしい女子教育が必要だとする、新たな女子教育論の潮流に乗ったのである。

『女学雑誌』は、「要するに、女学漸やく挽回するの今機に際して、如此良著作を吾学界に得たるは祝す可き限りなり」(ルビ・片桐)と、この書を紹介した⁽³⁶⁾。

このほか、『時事新報』『東京日日新聞』『国民新聞』『教育時論』『早稲田文学』『六合雑誌』『大阪朝日新聞』『大阪毎日新聞』『同志教育雑誌』に、好意的な紹介が載った⁽³⁷⁾。

2-2. いよいよ活動開始

広岡浅子と土倉庄三郎

『女子教育』を出版して、梅花女学校とは別に、新たに女子大学を創設する覚悟が固まった。成瀬はその方途を具体的に考え始めた。先立つものは巨額の資金である。成瀬は30万円を目標とした。

成瀬は、改めて、同郷の先輩、大阪府知事の内海

忠勝を訪ね、賛意と激励を受けた⁽³⁸⁾。ついで成瀬は、奈良県吉野の林業家・土倉庄三郎を訪ねた。土倉の4人の娘が創設時の梅花女学校に入学しており、当時同校の教員をしていた成瀬とは、旧知の仲だった。澤山保羅の影響もあってキリスト教学校の独立自給主義を強く信じていた成瀬は、非信徒である土倉の寄付を受領することを批判して梅花女学校を退職したのだが、この度は、真っ先に土倉を訪ねた。アメリカでハーヴァード大学総長のエリオットに学んだ資金募集の考え方が、彼を動かしたのだった⁽³⁹⁾。

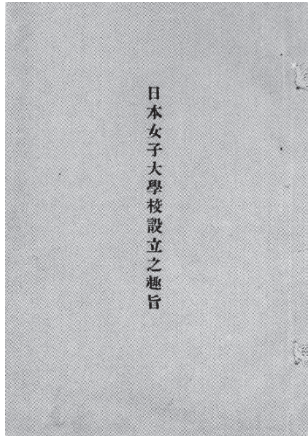
さらに成瀬は、土倉の紹介で、三井家の出で大阪の豪商加島屋に嫁いだ実業家・広岡浅子を訪ねた。当時の女性の境遇に義憤を感じていた広岡は、『女子教育』を「三度まで繰り返へして熟読玩味⁽⁴⁰⁾」し、「これこそ私が少女時代から寸時も念頭を離れなかつた我が国女子を哀れな境遇から救はんとの熱望を果さるべき光明であるかのやうに覚え⁽⁴¹⁾」、積極的な支援を約束した。広岡は、日本女子大学の現在地、目白の土地5千坪の寄付を実家三井家に仲介しただけではなく、大学創設後もしばしば大学を訪れ学生たちを激励するなど、経済面だけではなく教学面でも大学の発展に貢献した⁽⁴²⁾。

再度の上京

その後成瀬は、再び、今度は麻生正蔵と同道して上京し、総理大臣の伊藤博文と改めて面会した。面会に当たって成瀬は、三つの質問を用意した⁽⁴³⁾。
①女子大学の設立は国家的見地から必要と思うか。
②民間の事業として(つまり私立大学として)可能と思うか。
③もし女子大学設立が必要で可能だとするならば、助力してもらえるか。

これらの質問に対して伊藤は全面的な賛意を表した。『成瀬先生傳』が述べるように、「伊藤侯の神速明快な、而も深切な賛同と激励とは、先生が勇気を百倍した」であろう⁽⁴⁴⁾。成瀬はその後も、女子大創設の協力を得るため何度も伊藤を訪問し(しかし多忙のためほとんど会えず)、また発起人総代への就任要請をも考えたのであった(しかし結局発起人総代は置かず)⁽⁴⁵⁾。

さらに成瀬は、伊藤の紹介で文部大臣西園寺公望と面会し、貴族院議長・学習院長近衛篤磨を訪ねた。そして島田三郎の仲介を得て大隈重信、さらには大隈の紹介で渡沢栄一や森村市左衛門等々の、政



「日本女子大学校設立之趣旨」

（成瀬記念館所蔵）

財界の有力者の協力を得ることに成功した⁽⁴⁶⁾。

梅花女学校校長辞任

96年7月、成瀬は梅花女学校校長を辞し⁽⁴⁷⁾、本格的な募金活動を開始した。『創立事務所日誌』がこの年の7月17日から書き始められたのも、これと関係しているであろう。

9月9日には「日本女子大学校設立之趣旨」400冊の印刷を福音社に注文した⁽⁴⁸⁾。これは、前年6月に麻生正蔵に執筆依頼した趣旨書を改訂したものではないかと思われる。

「日本女子大学校設立之趣旨」に示された内容は、大学のほかに、附属校として幼稚園、小学校、高等女学校、専門学校を設置し、「下幼稚園より上大学部に至る迄首尾の系統整頓せる教育制度を一校内に設け、吾人が執る所の特殊の教育主義及び方法を実施し之を以て日本女子教育界の中心点たらしめんことを期す⁽⁴⁹⁾」という、壮大にして野心的な計画であった。

他方、日清戦争の勝利に高揚する社会状況を受けて、「明治二十七八年の役（日清戦争・片桐）は、宇内を震蕩し帝国をして世界強国の一たるの實を顕はさしめたり」（ルビ・片桐）との現状認識のもとで、「されば女子教育の振否は邦家汗隆の由て岐る、所なり⁽⁵⁰⁾」と、国家富強に資する女子教育の意義を強調した。『女子教育』で示したような、「人として」「婦人として」「国民として」の三点を挙げながら、「日本の家庭をして世界の模範たらしめん⁽⁵¹⁾」と、「世界の模範」の視点から、国家の基礎として

の家庭、その担い手としての賢母良妻の育成を力説したのだった。そのうえで、師範学校や高等女学校の教員を養成するという目的も掲げられた⁽⁵²⁾。

この「趣旨」や『女子教育』をもとに、関西地方を中心として賛助員、賛成員、さらには発起人を募り、成瀬は、新潟のほか、しばしば上京して支持の拡大に努めた。

そして9月28日には、広岡家が経営する加島銀行の資金を借りて、大阪府東成郡清堀村清水谷（現天王寺区清水谷町）に3.755坪（12.391㎡）の校地を取得した⁽⁵³⁾。

準備ばたん整ったのである。

2-3. 組織的活動の本格化

発起人の氏名発表

翌97年3月16日の『読売新聞』は、「女子大学設立の計画」と題して、「多年米国に在りて教育界の視察を遂げたる成瀬仁蔵氏ハ、我邦女子教育の割合に発達せざるを慨し、一の女子大学を設立して、女子教育の完全を図らんと、日夜奔走して四方に謀る所ありしが、京坂を始めとし、全国紳士淑女の応ずるもの、響の物に応ずるが如く、孰れも熱心に賛成を表し居れり。左れば設立地に就ても、内々京坂間に競争を試むる位にて、早晚一女子大学を見るに至るべし。今其発起人に名を列せし貴女紳士の姓名を挙ぐれば、左の如し」（句点・片桐）と報じ、伊藤博文、内海忠勝、大隈重信、渋沢栄一、土倉庄三郎らの妻や、西園寺公望、広岡浅子ら、総計29名の発起人の名前を掲載した。

第1回創立披露会

そして3月24日、東京星ヶ岡茶寮⁽⁵⁴⁾で発起人会が開かれ、翌25日、帝国ホテルで第1回創立披露会が開かれた。3月26日の『東京朝日新聞（第二回）』が「日本女子大学校創立会」と題して報じた記事は、以下の通りである。少々長くなるが全文引用しよう。その盛会の様子を窺うことができる。

「各国務大臣及び朝野の貴顕紳士貴夫人等、あらゆる名家の協賛を得て創立せんとする日本女子大学校ハ、昨日午後六時三十分より、帝国ホテルに於て其の創立会を開きたり。出席者ハ大隈、蜂須賀両大臣其の他、朝野の貴顕紳士、貴衆両院議員、新聞記者、貴夫人等二百余名にて、一同着席するや、本校設立の主唱者たる成瀬仁蔵氏謝詞を

述べ、次に近衛公爵ハ、他行の約あれバとて第一着に登壇し、余が女子大学校設立に付熱心に賛成の意を表するハ、^{とほしき}乏を学習院長に承くるを以て、学習院生徒七百余人が、個々校中に於ける教育を熟視の上、其家庭教育の^{ゆるがせ}忽にすべからざるを知るを以てなり。家庭教育とハ、取りも直さず、一家の内助たる妻女の賢不肖にあるなれば、国民教育の要素たる、女子の薰陶其宜しきを得ざるべからざるハ、言を待たずとの意を述べ、次に成瀬仁蔵氏登壇、女子大学校設立の主旨を、九段に分ちて逐条演繹推理し、女子教育の必要を述べ、大隈伯登壇し、余ハ一個の変形政事家にして、教育の事ハ一切素人なり、否教育に素人なるのみならず、女子教育の事に至りてハ皆無知らず、然れども成瀬君が、鋭意熱心、一身を女子教育に委して従事せらるゝの余り、余にも本会に出席して何か一言せよとの御求めあり、余も亦、成瀬君が至誠に対し、一言なかるべからず、との冒頭を述べ、夫れより、国家の本ハ国民なり、国民の本ハ夫婦なり、而して男女共に四千万中の国民なるも、男子ハ知識の女子より優れる為め、常に女子を服従的に制御すれば、表面こそ四千万同胞とハ云へ、内実二千万しかなき有様なり。是尤も憂ふべき事なりとて、男女の事を、金銀貨の、単位複位本位に比喩し、爽快流暢なる弁説もて論断し、次に蜂須賀侯登壇、女子大学の計画ハ至極結構にて、熱心に同情を表するも、他に是まで、種々立派なる名称の下に創立する諸会の如く、最初ハ立派に打てるも、其終りを全うせざるが如き事なきを切望す、又、余ハ今の処にてハ、一個人の資格にて賛成するも、文部省に於ても、将来多少の賛助を為す決心なりと述べ、次に江原素六、島田三郎両氏の演説あり。終て一同食堂に入り、立食の饗応を受け、席上百数名の賛成申込者あり、十時頃散会せり。因に記す、同夜役員を選定する筈なりしも、時間の遅れたる為め、追て選定することとなりたり」(句読点追加、ルビ・片桐)

演説者たち

最初に演説した近衛篤磨は、貴族院議長で学習院院長であった。戦時下に総理大臣を務めた近衛文麿の父で、1904年に惜しくも40歳の若さで没した。

成瀬の次に演説した大隈重信は、当時の第2次松方内閣の外務大臣、蜂須賀茂韶は文部大臣だった。



近衛篤磨
(『四拾年史』「口絵」)

江原素六と島田三郎は共にクリスチャンで、江原は1895年創立の麻布中学校の創立者で校長であり、島田は衆議院議員として大隈と行を共にするとともに足尾銅山鉍毒事件や廃娼運動にも積極的にかかわった。島田はこの演説で、松村介石から成瀬を紹介されたこと、また成瀬を大隈重信に紹介したことなどについても述べた。

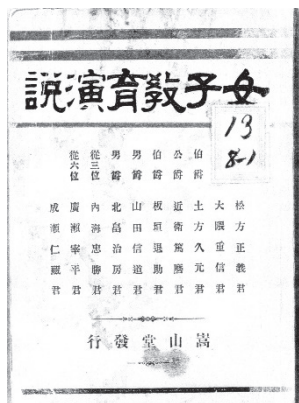
成瀬がここで行なった演説は、「高等女子教育の必要を論じ併せて其の反対説に答ふ」と題するもので、女子高等教育の必要を、世界の大勢から説き起こし、時期尚早論など、女子高等教育に対する8つの疑問に、正面から応えようとするものだった⁽⁵⁵⁾。

青木嵩山堂は、早々に、以上すべての演説に加え、当日欠席した内海忠勝の「日本女子大学校を紹介す」という一文を入れて、『女子教育談』を4月に刊行した。ここには成瀬が、3月13日に帝国教育会で行った「女子教育振起策」という演説も加えられた。

大阪での第2回創立披露会

5月26日には大隈外相の来阪を受けて、大阪中の島ホテルで第2回発起人会が開かれた。大隈は、女子大学を大阪に設立する必要を述べたというが⁽⁵⁶⁾、『女学雑誌』第443号(1897年6月10日)は、「日本女子大学校を大阪に設置すべきか、果た東京に設立すべきかに就き同発起人中にも議論あり、されどいよへ成瀬氏当初の志望の如くに、大阪に設置せらるゝ次第となりたる」と報じており、大阪決定に異論があったことをうかがわせる。

次いで夕刻から第2回創立披露会が開催され、大



『女子教育演説』表紙
(成瀬記念館所蔵)

限、近衛のほか土方久元宮内大臣ら 339 名が出席し、内海大阪府知事が開会の趣旨を述べ、成瀬、大隈、土方、近衛の演説の後、板垣退助、山田信道（京都府知事）、北島治房（元大阪控訴院院長）の賛文朗読、さらに広瀬幸平（初代住友総理事）の談話筆記朗読があった⁽⁵⁷⁾。

成瀬は「日本女子大学設立の必要」という演説を行い、7 点にわたって日本の教育の問題点を指摘し、6 つの理由を挙げて女子大学設立の必要を訴えた。

これらの演説は、『女子教育演説』と題して 8 月に、これまた青木嵩山堂から出版された。この書には、冒頭に、成瀬の「女子教育問題に就て」という一文が付されたが、ここで成瀬は、大阪に最初の女子大学を設立すべきことを力説した⁽⁵⁸⁾。題辞は、時の総理大臣松方正義が寄せた。

『女学雑誌』の支持

3 月 25 日発行の『女学雑誌』第 438 号の社説「女子大学」は、その冒頭で「夫れ、人を重んずるものは之を教育せざる可らず、之を教育するものは其の高きを冀はざる可らず。既に女性を敬重して之を優遇すべき所以を承知したる以上は、遂に女子の高等教育を要求すべきは必至の数なり。苟くも、女子の高等教育を要求するものは、当に女子大学を所望すべきこと勿論の結果にあらずや」と述べ、成瀬の女子大設立の動きを「頗る快心の事」と高く評価した。そして「今や成瀬君が大学設立の計画ある事、勃率たるに似て実に然らず。其の女学に拮据せられしは既に十年に近かるべし。大学の計画ありて

より、既に一年有余の経営を経たり。願くは、積力迸発し、精神貫徹して不日着々実地の成效あらんことを。」（ルビ・原文）と、成瀬の活動への期待を表明したのだった⁽⁵⁹⁾。

6 月麻生正蔵は、女子大創設の活動に専念するため同志社教員を辞職した。

このように成瀬の日本女子大学創設運動は、大いに盛り上がり、きわめて順調なスタートを切った、かのようであった。

『女学雑誌』は第 440 号（1897 年 4 月 25 日）の「片々」欄に、「日本女子大学校」という見出しで「設立賛成者の多数の肺肝を貫きて、冷汗を催さしむ。」と記した。成瀬の女子大学創設運動は、賛成者には喝采をもって迎えられたが、「ひやあせ」をもってこれを受けとめた者もまた、少なくなかったのである。

2-4. 逆風

福沢諭吉の批判

「冷汗を催さしむ」動きは、ただちに現れた。

帝国ホテルでの第 1 回創立披露会直後の 4 月 7 日、福沢諭吉が主宰する『時事新報』は「女子の本位如何」という社説を掲載した。

前述のように、福沢はちょうど 3 年前、成瀬と面談した。その成瀬が、いよいよ女子大創設の旗揚げをした。しかも福沢と心許し合う仲だった大隈重信が、積極的に支援している。福沢の、この問題への関心の高さが、『時事新報』の素早い反応に現れている、と言えるであろう。しかし福沢は、この社説で女子大学創設運動を批判した。

「国民教育の複本位」と題する創立披露会での大隈重信の演説は、金本位制採用をめぐる問題に関連させて、貨幣制度は金本位が良いかもしれないが、教育は、これまでの男本位から、女子教育も重視した男女複本位にすべきだ、と語るものだった。これに対して福沢は、正室のほかに側室等がいる現実を指摘して、「今日の実際問題は、我日本国に於て家庭の制度は正室一人の単本位に限るべきか、又は側室外妾等の雑本位をも許す可きかを決すること」が先決だと皮肉り、「賢母の徳化など云ふ高尚なる目的は到底達す可らず、無益の骨折と云ふ可きのみ」と批判した⁽⁶⁰⁾。

3 年前の成瀬との面談でも語ったように、福沢は



『女鑑』創刊号

(日本女子大学図書館所蔵)

「女権」に関心を持っていた。しかし福沢の「女権」は、家庭内の、妻母としての地位向上に留まっていた、女性の社会進出を主張するものではなかった。「妊娠出産に引続き小児の哺乳養育は女子の専任にして、為めに時を失ふこと多ければ、学問上に男子と併行す可らざるは自然の約束と云ふも可なり⁽⁶¹⁾」と主張する福沢にとって、女子高等教育は「無益の骨折」であった⁽⁶²⁾。

『女鑑』の批判キャンペーン

さらに、女子大学創設批判の急先鋒になったのは『女鑑』である。

『女鑑』は1880年代後半の欧化主義的風潮に反発して、儒教主義・国粹主義的な女鑑、すなわち「女性の手本」を示そうとする女性総合雑誌として、1891年8月に創刊された⁽⁶³⁾。同誌第142号(1897年10月5日)によれば、東京府高等女学校生徒361人のうち、最も多い114人の家庭で購読しているとのことであった⁽⁶⁴⁾。

第130号(1897年4月20日)には、加茂之満執筆の論説「女子大学校の設計につきて」が掲載された。これは、日本は「米国の如く、男子よりも、女子を尊むが如き傾向のある国」ではないから、「女子は、専ら、社会の裏面」にあつて男子を支えるものであり、女子大学の設立などは「早計」だと、主張した。

また第132号(1897年5月20日)の社説「女子教育の結果」は、次のように述べた。

「試に思へ、吾人が常に途上に於て、相接し相見
る所の女子を、その容姿、やさしくして淑女の風

あり、しとやかにして温雅の趣きあるものは、多くは学校教育を受けたること少き女子にして、而して、いかにも生意気に、われこそはと云はぬばかりのかほつきし、わざと、髪を束髪に結び、要もなき眼鏡などかけて、見るだも忌はしきかたちしたるは、多く中等以上の教育をうけたる女子なること、吾人は、実見上に於て、之を断言するに憚らず。」

さらに、第134号(同年6月5日)と第135号(6月20日)に連載された論説・齋木文夫「女子教育に就きて」は、成瀬の女子教育論はキリスト教主義だと批判して梅花女学校や新潟女学校での経歴を取り上げ、「論者(成瀬・片桐)は耶蘇教を選取せんとする者なり、然らざるば、女子教育に於て、宗教教育の必要なるを主張し得ざる筈なり。」と述べた。

次いで第137号(7月21日)と第140号(9月5日)に連載された文明童子「日本女子大学設立に就て」という論説は、匿名使用のゆえか、さらに露骨に、「山師」「詐欺師」などの語を使って、日本女子大学は「耶蘇教女子大学を立るに在らざるか」と述べた。

第141号(9月20日)の高角正人「成瀬仁蔵君の女子教育問題を読む」は、「我が国の女子に、比較的高尚なる教育を施すの不必要なることは、我が建国以来の国風国体を熟知せるもの、明に認識する処なり」と述べ、成瀬の女子教育論は、「必、例を欧州に引き、証を米国に取り」「如何にも他邦人が我が教育を評するが如き嫌なき能はず」と批判して、「聊、女子が内を治めて、男子は外にあたることは、我が国神代よりの制度」と主張した。

さらに第144号(11月5日)の社説「またも女子の高等教育に就きて」は、女子高等教育の目的は、「真の高尚優美なる日本女子を養成するにあり」と主張し、第146号(12月5日)の加茂之満の論説「良家の女子には高等専門の学科を授くる必要なし」は、「世界女徳の根源を造るべきものは、即、我が国女子の貞操柔順、是なり。」(傍点・原文)と論じた。

このように、『女鑑』の主張は、日清戦争勝利によって自信を得た国粹主義的なナショナリズムを背景にして、日本伝統の「女徳」を称揚する立場から、成瀬の女子高等教育論を西洋崇拜的なものと見

なして批判したのであった⁽⁶⁵⁾。

大阪設置への批判

これに加えて、第2回発起人会でも議論があったように、大阪に設置することへの反対意見も強かった。

5月29日の『大阪毎日新聞』は、「女子大学（反対論）」との見出しで5点にわたって反対論を述べた。要するに、大阪は教育機関を置くには適しておらず、まして「学徳兼備の賢良貞淑なる女子を造出するには不適當の地なり」というのであった。そして次のように皮肉った。

「計画者の志や美なり、奔走者の熱心や嘉みすべし、然れども其経世的眼光を欠き秩序の方法を知らず、或る妄想的感覺の支配する所となつて、唯一意狂熱するの觀あるに至ては寧ろ憫まざるを得ず」（句点追加・片桐）

陸羯南が社長兼主筆を務める『日本』も6月1日号で「女子大学と大阪」と題し、「人情の軽薄なる、風俗の淫靡なる、下々の下界とも云ふべき大阪を選んで女子大学を設けんとするは、余程の物好と云はざるを得ず」と記した。

このような、大阪蔑視とも言うべき女子大学反対論に対して、大内青籐が主宰する仏教新聞『明教新誌』は「女子大学は遠からずして大阪市に設置せられんとす、嗚呼、日進月歩文明潮流の賜ものとして吾人焉んぞ之を賀せざるを得んや」と、賛成論を掲載した⁽⁶⁶⁾。

成瀬仁蔵の反論

以上のような、激しい日本女子大学創設批判に対して、正面切って、女子大学創設を支持したのは『女学雑誌』であった。

『女学雑誌』が第444号（6月25日）に、成瀬仁蔵が3月25日の第1回創立披露会で行った演説「高等女子教育の必要を論じ併せて其の反対説に答ふ」を、長文にもかかわらず全文掲載したのも、このような態度の表れであった⁽⁶⁷⁾。

さらに『女学雑誌』第448号（8月25日）は成瀬の論説「日本女子大学校の組織並に大阪に設置するの理由」を掲載した。成瀬はここで女子大学設立の意義を改めて強調するとともに、「教化の中心は成べく之を地方に分配」すべきであり、「大阪は実に今後に於る日本社会の活動の本源にして又中心なり」と、大阪に女子大学を設立する意義を力説した

のだった。

このほか成瀬は、『家庭雑誌』第99号（1897年4月10日）に「女子高等教育の急務（女子大学校設立の趣旨）」、『太陽』第3巻第9号（1897年5月）に「高等女子教育の必要」、帝国教育会の機関誌『教育公報』第199号（1897年9月5日）に「女子教育問題に就て」⁽⁶⁸⁾、さらに『教育時論』第456号（1897年12月15日）に「日本女子大学設立に就て」⁽⁶⁹⁾など精力的に、女子高等教育の必要を訴える論説を発表した。

2-5. 窮地に立つ成瀬仁蔵

募金活動の停滞

しかし衆寡敵せずというべきか、募金活動は停滞した。

日清戦争後、国力の基礎としての女子教育への関心が高まりはした。しかしそれは、家庭の中での女性の役割に期待したものであって、必ずしも、女子高等教育論には結びつかなかった。女子大学の設立を「無益の骨折」と批判した福沢諭吉の『時事新報』社説などがその典型的な主張であった。

女子高等教育への無理解に、経済の不況が追い打ちをかけた。日清戦争後の好況が一転して、その反動としての不況を招いたのであった。

また、政界の大物の権威に頼った運動の脆さが露呈した、とも言えた。

「時勢の悪しき為め追々遷延し、困難を増し、天下に対し、広岡に対し、土倉に対し、発起人に対し、学生に対し、友人に対し、万人に対し、気の毒千万……小生の責任のみ重し。」（句点・片桐）⁽⁷⁰⁾

成瀬は、11月4日の麻生正蔵宛て書簡で、珍しく弱音を吐いた。

さらに成瀬は、翌1898年1月6日の麻生宛書簡に、次のように記した。

「先夜内海氏ト、夜深更ニ至るまで、種々内閣組織等ニ関し話致し、又学校の事も相談致申候。然ルニ、若し小生が、一時ニても他ニ職を取ル様の事をしてハ、此業ハ破レルならんと被申候」⁽⁷¹⁾（傍点・片桐）

おそらく、生活の困窮のこともあってであろう、成瀬が、糊口をしのぐための仕事にでも就こうかと相談したのに対して、そんなことをしたら女子大学

の創設そのものが危うくなる、と内海は忠告したのだった。成瀬は、そこまで、追い詰められた。

離婚

成瀬が、妻万寿枝との離婚を決意したのは、このような、時期であった。

成瀬は、前年12月14日の麻生正蔵宛て書簡に「万寿枝の事も河村、服部、兼重、河□（以上二名万寿枝の親類）、綱島、村井の人々ニ集会を乞ヒ・・・相談の上万事を決定致申候。此件ニ関し毎度御配慮を煩はし奉謝候。⁽⁷²⁾」と記した。離婚についての協議のことと思われる。書簡中「服部」とあるのは、義弟服部他之助のことであるが、服部他之助の次の文章も、離婚協議に関わるものであろう。

「嘗て日本女子大学校が設立せらるゝ一寸以前に、或る問題がありまして、私共親戚一同が寄り合つて相談を重ねた事がありました。此の様な如何なる場合でも先生の説であると、仮令その意味が判然と諒解出来ない迄も、誰一人として先生の心、即ち先生の動機を疑ふ者はありませんでしたから、先生の所論が何時も勝利を得ました。⁽⁷³⁾」

成瀬は、2月2日、離婚届を出した。

成瀬は、窮地に立った。1897年10月4日から翌年4月30日まで『創立事務所日誌』に何の記載がないのも、成瀬の窮状を物語っているだろう。

中川小十郎との出会い

1898年1月12日、松方正義内閣に代わって第3次伊藤博文内閣が成立した。文部大臣には成瀬に理解がある西園寺公望が再び就任した。

前にも記したように、西園寺は伊藤の腹心だった。第2次伊藤内閣で、病氣退職した井上毅の後任の文部大臣として初入閣したのに続いての入閣だった。そして文部大臣秘書官に再び就いたのが、西園寺の忠臣と言うべき中川小十郎だった。彼は、女子高等師範学校教授を務めた中川謙二郎の甥で、女子教育にも関心があった。

西園寺の紹介で中川小十郎と懇意となった成瀬は、彼の誘いで麻生とともに上京し、その官舎に下宿した。成瀬にとって、募金活動の停滞を打ち破る、好機到来と感じた。

しかし幸運は長く続かなかった。4月30日、西園寺は病気のため文部大臣を辞任してしまっただけである。



中川小十郎
(立命館大学 H.P.)

おまけに新聞報道によれば、文部次官の菊池大麓は、西園寺が成瀬の理解者であることを知ってか知らずか、出張先で次のように述べたと言う。

「大坂の女子大学ハ、あれだけ立派な賛成者があり、金もある人々多き故、早く出来そうなものなれど、余ハ斯かる事ハ嫌なり、女子教育ハ、そんなにせずとものこと、思ふなり、元来が私立大学といふものハ困難なるに、女子大学と来てハ尚更困難の事ならん⁽⁷⁴⁾」

こうしたなか5月に、成瀬と麻生は募金活動の拠点となる創立事務所を、東京にも置くことにした。場所は神田一ツ橋の帝国教育会内で、西園寺の辞任とともに文部省書記官兼参事官を退いた中川小十郎が創立事務幹事長に就いた。中川は、規定を整備するなどして、事務所の体制を整えた。7月には、成瀬の紹介によって、広岡家が経営する加島銀行の理事にもなった。

そしてこの間、成瀬は3月に京都の平安女学校（現平安女学院大学）の卒業式で記念講演を行い⁽⁷⁵⁾、6月には岡山県教育会で「女子教育之急務」と題する講演を行うなど⁽⁷⁶⁾、女子教育の指導者としての活動をつづけた。

こうして大阪のほかにも東京にも募金活動の拠点を置き、西園寺を後ろ盾にもつ中川の指揮で、募金活動は順調に進展するかに見えた。しかし、ことは容易ではなかった。

1月に成立した第3次伊藤博文内閣は早々と6月に総辞職し、大隈重信内閣（いわゆる隈板内閣）が成立した。しかしこの内閣を支えた憲政党は分裂し、11月には大隈内閣も瓦解した。成瀬が頼りに

した大物政治家たちを巻き込む政界の混乱は、募金活動にも影響を与えた。1898年10月24日から翌年4月22日まで、『創立事務所日誌』は、再び長い空白状態に陥った。

3. 再起

3-1. 難題克服

久しぶりの創立委員会

1899年5月8日、局面を打開するための創立委員会が開かれた。

5月11日の『大阪毎日新聞』は「女子大学設立寄付金募集」との見出しで、「日本女子大学の発起者は世間不景気の為め寄付金募集を見合せ居たるが、今回愈々着手する事となり、一昨日帝国ホテルに於て大隈、岩崎（弥之助、日本銀行総裁）、渋沢、児島（^{これかた}惟謙、元大審院長）、土倉其他の委員相会し、委員だけの出金額を取極めれば、其他多少に關らず募金に着手する都合なりといふ。」（句点（ ）・片桐）と報じた⁽⁷⁷⁾。

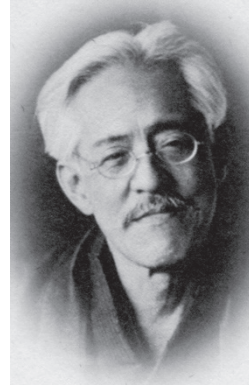
しばらく停滞していた募金活動が、ようやく、再び動き始めた。しかし新たな困難が浮上してきた。創立委員内部の意見の不一致である。

5月22日の『大阪毎日新聞』によれば、「女子大学設立地については発起人中にも二説あり、大隈伯岩崎男等は主として大阪説を唱へ、渋沢氏等は東京説を主張し、未だ何れとも決せざる由⁽⁷⁸⁾」とのことであった。渋沢は、巨額の資金を集めるには東京での寄付金集めを重視して、設置場所も東京にすべきだと、経済人らしい判断をしたのであろう。

東京女学館との合併問題

さらには既設の東京女学館と合併してはどうかとの意見も出て来た。

東京女学館は、帝国大学教授でのちに文部大臣も務めた外山正一を中心に、伊藤博文、渋沢、岩崎などの賛同を得て発足した女子教育奨励会を母体に、1888年に設立された学校だった。『創立事務所日誌』によると、最初にこれを言い出したのは、文教行政の重鎮辻新次であったようだが⁽⁷⁹⁾、渋沢の回顧談によると、この件で、成瀬と外山を引き合わせたのが、両者全く意見が合わず犬猿の仲だったという⁽⁸⁰⁾。この問題は8月から9月ごろにかけて渋沢栄一を中心として協議が続けられたが、結局、破談となった⁽⁸¹⁾。



晩年の戸川安宅

（目時美穂『油うる日々』359頁）

自らの構想の実現を目指す成瀬にとっては、到底受け入れ難い提案だったのであろう。

戸川安宅の登場

成瀬は東京を中心に、当面の募金活動に全力を傾けることにした。この時頼りになったのは、7月に新たに事務幹事となった戸川安宅^{やすいえ}（残花）だった。彼は旗本出身の旧幕臣で東京に広い人脈を持っていた⁽⁸²⁾。そして成瀬自身も、このころから、設置場所を東京にすることを、本格的に考え始めたであろう⁽⁸³⁾。

当時の『創立事務所日誌』をたどると、成瀬、麻生、戸川らが、政財界の有力者はもちろん、学者、教育家、言論人等、世論に影響力を持つ人々を含め、女子大学創設への賛意と寄付を求めて、手当たり次第に、東京中を駆けずり回ったことが知られる。

特に戸川は、東京市内の区長と次々と面会して、各区内有力者の情報を得るなどの協力を求めた。より多くの人々から、広く寄付を募ろうとしたのであろう。また国際通の佐藤顕理^{けんり}には、英文趣意書をもって、英米人らにも寄付を働きかけることを依頼した⁽⁸⁴⁾。翌1900年1月1日には各自分担して年始礼を行ない、成瀬は1人で1日に70余人を巡回した⁽⁸⁵⁾。

東京設置に正式決定

1900年2月14日、成瀬の呼びかけで、創立委員会が帝国ホテルで開かれた⁽⁸⁶⁾。会する者は、近衛篤磨、大隈重信、渋沢栄一、住友吉左衛門、内海忠勝、土倉庄三郎、濱岡光哲、伊藤徳三、広岡浅子、野崎武吉郎、児島惟謙、嘉納治五郎、成瀬仁蔵、戸

川安宅、麻生正蔵の15名であった⁽⁸⁷⁾。この会議において、①設置場所を東京とすること、②寄付金額をあらかじめ指定して依頼すること、③東京女学館との合併はしないことの3点が正式に決まった。創立委員の中で一致していなかった①と③に決着がついたことが、創設運動の弾みとなった。また②も、募金活動の効率的な展開のために重要な決定だった。

特に、設置場所が東京に正式に決まったことは重要であった。しかしそれは、成瀬にとっては、気の重い問題でもあった。大阪の校地は確保してあったが、東京は、全くの白紙だった。果して東京に、設置場所を取得できるのか。既に確保した大阪の校地はどうするのか。

成瀬はこれまで、女子大学を大阪に設立する必要を力説してきた。ここに来ての急な変更を、大阪の後援者たちは理解してくれるのか。

成瀬たちの東京での活動は一段と加速した。東京に女子大学を設立することを宣伝し、理解を得ること、そして設立に適する場所を探すこと、この二つが同時に進められた。

この中で特に、戸川が居住していた牛込区との関係が注目される。牛込区は、大隈らが創立した東京専門学校の地にも隣接していた。

『創立事務所日誌』1900年2月5日の項には、次のようにある。

「戸川氏成瀬氏、牛込区一級公民ヲ区役所楼上ニ招待シ成瀬氏区長小島官吾氏ヨリ演舌アリ、近日開会セラルベキ区会ニ提出シ議員ノ賛同ヲ請フコトニ決ス、並ニ本区教育会ノ賛同ヲ乞フコトヲ書記五味氏ニ託ス」

「一級公民」とは多額納税者である。区長の協力を得てこれらの人々を招待し、女子大学創設の意義を説いたのであろう。さらに4月14日の項には、戸川が「小島牛込区長ニ面談、地所等ニ相談アリタリ」とある。校地についても、区長の小島官吾と相談したのではないかと推測される。

気の重い大阪工作

一方『創立事務所日誌』によれば、成瀬は4月中旬から5月初めまで、京都、大阪に滞在して、当地の発起人や創立委員の理解を得ようと努めたものと思われる。

そしていったん帰京した成瀬は、5月8日に広岡

浅子の実家、三井小石川家当主の三井三郎助と面談して「地所ノ事ヲ依頼」した。翌9日には「敷地ノ候補地ヲ見分ス」とある⁽⁸⁸⁾。成瀬はこの頃から、広岡浅子の仲介で、大学の校地について三井家の格別の協力を得ようと考え始めたようである。

5月15、16日の両日、改めて三井三郎助と面談し、同日大阪に再び出張した。22日の発起人会のためである。

発起人会の夜成瀬は、東京で結果を待つ麻生と戸川に次の手紙を送った。

「拜啓今夜之発起人会ハ大ニ好都合にて満足之結果を得申候、今夜已ニ二十時ヲ過ル十五分、明日も早朝奔走可致ニつき。余ハ帰京之上。

匆々

廿二日

成瀬仁蔵

御両君へ

之にて大阪も根底出来申候⁽⁸⁹⁾」

「満足之結果」が得られた。とはいえ、議論が長時間に及んだことが窺われ、成瀬にとって、まことに身も細る思いであったろう。ともあれ、「之にて大阪も根底出来申」したのであった⁽⁹⁰⁾。

なおこの発起人会について7月7日の『読売新聞』は、「女子大学創立事務の進行（位置ハ小石川）」との見出しで、次のように報じている。

「全国有力家の発起計画中なりし日本女子大学校設立の位置に就てハ、東京大坂の間に於て引張り風となり、何れとも決定に至らざりしが、先頃大坂発起人会に於て、愈々東京に設立する事に賛成し、大坂に於ても益々同志間に遊説して寄付金募集に尽力する事に決定」（句点・片桐）

3-2. 校地目白に決定

三井家の援助

成瀬は、6月11日夜大阪から帰京し、翌12日、おそらく、大阪の状況報告のために三井三郎助を改めて訪ねた。

そしてその直後、16日に、三井室町家当主三井高保と三井総領家の三井北家当主三井八郎右衛門を訪問した。このときは病気を理由に、直接会うことはできなかったようだが⁽⁹¹⁾、19日に、成瀬は、再度、三井家を訪問して「校舎敷地寄附セラル、事ニ決議セラレタリトノコト」という回答を得た。この

日の『創立事務所日誌』には、欄外に「〔敷地確定〕」と記されており、成瀬らの、安堵と喜びの大きさを示している。

そしてその3日後の6月22日に、「成瀬戸川麻生氏相携へテ小石川目白ノ敷地ヲ見分」したのであった。

巖本善治への報告

7月10日、成瀬は巖本善治と面談した。女子大学設立のめどが立ったことを報告したのであろう。7月31日付の『女学雑誌』第511号「片々」欄は、「女子大学校」と題して次のように報じた。

「数年来鋭意熱心に尽力し幾度か経済界の難境に妨げられたる女子大学校の計画も、今や略ぼ緒に就き来年四月より開校の運びに決定せられたり、現に応募せし寄附は、三井一家より校用敷地として小石川豊川町に四千七百坪を義捨せし外に、十万円あり、乃はち本年九月より、土木を起し、初めの設計に見えたる幼稚園と小学校とは後にゆづり、先づ高等女学校と大学部中の文学部及び家政部を新設さることとなれり。難関を経過し先づ第一段の進歩を了したるは、吾れ人ともに女学の為に祝すべきこと也。」（ルビ・片桐）

準備加速

校地確定によって、ようやく、翌年4月の開校が、具体的な目標となった。開校まで半年あまり、準備は、急がねばならない。募金活動を継続する一方で、校舎設計・建築、学校規則起草・制定、文部省東京府小石川区役所等関係当局との折衝、教授陣の選定・依頼と、まことに慌ただしく、開校に向けた具体的な準備が加速した。

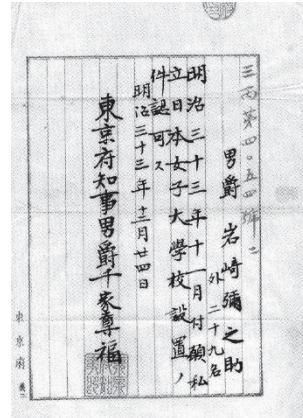
離婚した妻の万寿枝が病没したのは9月13日、ようやく女子大学創設が順調な軌道に乗った時であった。

他方、10月22日の創立委員会で、校長成瀬と学監麻生が正式に決まった⁽⁹²⁾。11月1日、麻生は、文部省に普通学務局長沢柳政太郎を訪ね、高等女学校を大学に付設することが可能であることを確認した⁽⁹³⁾。

11月になると、女子大学開校を伝え聞いた志願者が現われ始めた。11月13日の『創立事務所日誌』には「入学志願者陸續として来る」とある。

各種学校として認可

12月1日、日本女子大学校の設立願書を東京府



日本女子大学校設置認可
(成瀬記念館所蔵)

に提出した。女子大学は、依拠する規定がないので、「高等女学校ニ類スル各種学校」として扱われ、認可先が府県知事なのであった。成瀬らは同時に、専門学務局長上田萬年や沢柳など文部省高官との面談を重ねた。

12月24日、ついに設置認可を得た。認可先は、女子大学校は東京府、附属高等女学校は文部省であった。高等女学校の認可先は、高等女学校令の規定によって文部大臣なのであった。

このことについて『読売新聞』（12月31日）は「女子大学許可の奇態」との見出しで、「文部省にてハ、現行大学令中にハ私立大学を認められざればとて、遂に女子大学部ハ各種学校の部門に入れ、同一校舎に於て同一教師の教授に成る同一体の学校をして、無理にも二校に切り離し、附属高等女学校のみ文部省より直接に許可を与へ、大学部ハ却て東京府知事の管轄に帰し、知事の許可を受くるの奇態を生ずるに至りたり」と報じた。

巖本善治の変節

翌1901年1月4日、成瀬は巖本善治を訪ねた。設置認可が下り、いよいよ4月に開校できることを、年始のあいさつを兼ねて報告に行ったのであろう。このとき巖本がどのような反応をしたかは分からない。

しかし、2月25日刊行の『女学雑誌』第513号の論説「女子大学論」は、「今四月より^{いよいよ}開校すべきこととなりしと聞く日本女子大学校の如き」について、その課程が低度であると難じ、「凡そ斯る

程度の課程に名^{なづ}けて大学部と称し、而も之を以て時勢の度に応じたる者と揚言するに至ては、寧ろ今の女学を侮辱するもの也」と批判したのであった。わずか半年余り前、7月31日付の『女学雑誌』第511号で「吾れ人ともに女学の為に祝すべきこと也」と報じたというのに、これはいったいどうしたことか。

じつは『女学雑誌』は、第511号を刊行したあと長期の休刊に追い込まれた。次号第512号が刊行されたのは、約半年後の1901年2月6日であった。そして第514号を3月25日に刊行してから、再び8月31日刊行の第515号まで半年余りの長期休刊に陥り、さらに2年近い長期休刊のち、第516号は1903年6月15日に刊行された。すなわちこの時期、巖本善治は、『女学雑誌』刊行の、ということはすなわち、女子教育そのものへの意欲を喪失してしまったのであった⁽⁹⁴⁾。

3-3. いよいよ開校

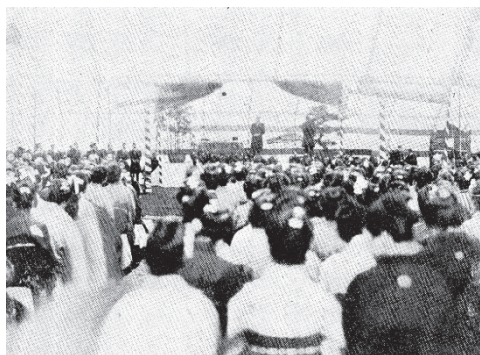
開校式

1901(明治34)年3月2日から『東京朝日新聞』に生徒募集広告が掲載された。4月8日から入学試験を行うとのことだった。

4月13日の『読売新聞』には、「女子大学職員の決定」との見出しで、職員、教授、嘱託教師、科外講師、校医、附属高等女学校教諭、嘱託教員の全氏名が掲載された。

そして4月20日に、待ちに待った開校式が挙行された。

翌日の『読売新聞』第1面は「女子大学校開校式」の見出しで、次のような長文の記事を載せた。



開校式
(『四拾年史』「口絵」)

開校式の様子とともに、開校時の日本女子大学校の状況が具体的に分かるので、少々長くなるが全文引用しよう。

「女子大学校の開校式ハ、既報の如く、昨日午後一時より、小石川区高田豊川町なる新築校舎に於て行れ、構内に天幕を張りて式場を設け、先づ奏楽(君が代)に次で教育勅語の捧読あり、次にドクトルケーベル氏の祝歌あり。次に渋沢栄一男ハ創立委員兼会計監督として、西園寺侯ハ發起人として、大隈伯ハ創立委員長として各一場の演説をなし、次に松田(正久)文部大臣、近衛(篤磨)学習院長、千家(尊福)東京府知事、日本女子教育会長公爵母堂毛利安子、菊池(大麓)東京帝国大学総長、細川(潤次郎)華族女学校長、高嶺(秀夫)女子高等師範学校長、土方(久元)女子教育奨励会委員長等の祝辞若くハ祝辞代読あり、奏楽の裡に式を終り来賓一同立食の饗応を受たり。

女子大学校は前記の如く小石川区高田豊川町の閑静なる場所に在りて、其の敷地ハ三井三郎助氏より寄付したるもの坪数五千四百坪あり、昨年九月より建築工事を起し先頃全く竣工したるものなるが、本館及び理化教室にて二百九十四坪余、寮舎及び其他にて三百五十三坪余、講堂、教授室ハ勿論、生徒控室、同寄宿舎、礼式場、割烹場等あり、殊に寄宿舎ハ二階建の建物二棟にて、之を八室に區別し、校長舎監の居宅に接近しあり、嚴重なる監督を設けて、父兄の印鑑を所持するもの、外ハ、一切寄宿生徒に面会せしめず、且つ応接の間を設け、此処にて外来者に応接せしむること、し、尚一室に同居する生徒にハ家族的生活を為さしめて、各自々炊せしめ、割烹其他の事に至る迄、学校を卒業せば直ちに充分家政を整理する事を得せしむる方針なりとぞ。

学科ハ英語、国文、家政の三科に分ちあれど、米国某学校の最新教授法に依り、生徒の発達すべき方向に随つて之を誘導し、他の学科ハ徐々に之を授くる方針なりといふ、総じて云はゞ、我邦固有の学科と欧米のもの^{みなつ}とを両ながら教授し、生徒をして、自由に能く之を融和せしむるの手段を取るべしとぞ。

教授諸子の氏名ハ既に記せし如くなるが、教授の方法ハ他の学校の如く、口授筆記せしむるもの

多く、随つて教科書ハ未だ確定せざるものもあり、教授の中にて、中島歌子ハ和歌及び書法を担当し尚古今集を講じ、英語及び英文学ハミス、グリーン氏フリーマンを用ひ、三輪田真佐子ハ漢文及び国文を担当、それと重に史記列伝及び論語を講じ、国文学ハ関根正直氏担当にて物語ものを講ずべしとなり。

目下入学者ハ既に五百余名に及び、内高等女学校に入りしもの凡そ四百名、大学部へ入りしもの凡そ百余名あり、学科八年々高尚なる方に進むる筈にて、或ハ大学科三年と定めたる上ハ、向後の都合にて更に二年を加へ、充分高尚なる学科を授くる計画を立てつゝ、ありといふ」（句読点追加、人名の（ ）・片桐）

順調な船出

5月9日の『東京朝日新聞』は、「日本女子大学校」の見出しで、次のように報じた。

「開校日尚ほ浅きも、地方より続続入学を申込み者多く、既に予定の学生を入学せしめたる今日、如何ともなし難く、一々拒絶し居る由なるが、入学生の総数ハ四百六十名余に達し、内大学部学生ハ百五十名にて、寄宿舎の如き二棟の設備あれど既に満員にて、二百有余名の学生を通学せしめ居る有様なれば、成瀬校長以下八寄宿舎増築の内議中なりと」

じつに多くの困難に遭遇したが、その苦勞を吹き飛ばすような成果をもって、日本女子大学校は迎えられるのであった。いかに多くの若い女性たちが、女子大学創設を待ち望んでいたかを、改めて示している。

順風満帆の船出ではあったが、設置場所を大阪から東京に変更したことに、成瀬自身は忸怩たるものがあったのではないと思われる。

大阪校地の行方

かつて校地として確保した大阪府清水谷の土地には、大阪府立清水谷高等女学校が設置された。これには、衆議院議員から大阪府知事に就任した菊池侃之の果たした役割が大きかった⁽⁹⁵⁾。菊池は、日本女子大学校創設の発起人でもあった⁽⁹⁶⁾。

菊池知事の、高等女学校は大阪市ではなく大阪府が設置するとの方針のもと⁽⁹⁷⁾、1900年9月に大阪府第一高等女学校が設置認可され、これは翌年3月に大阪府清水谷高等女学校と改称され、さらに大阪

府立清水谷高等女学校となって6月12日に開校式を行なったのだった。奇しくも日本女子大学校開校式の2か月足らず後のことである。

しかも、両校は、意外にも、その後も深い関係が続いた。何よりも、初代校長・大村忠二郎と成瀬との関係が、深い。

清水谷高等女学校との親しい関係

大村を校長に呼んだのは、菊池大阪府知事だった。そして大村は、宮川経輝から洗礼を受けたクリスチャンでもあった。宮川経輝は、成瀬が紹介した広岡浅子にも洗礼を授けた。したがって大村は、浅子とも親しく、生徒の回想文によれば、しばしば浅子が同校を訪れ、また大村は、浅子に合わせるために生徒を加島銀行に連れて行ったという。

さらに成瀬は大村に、日本女子大学校附属高等女学校の校長就任を囑望したこともあったが、結局は実現しなかった⁽⁹⁸⁾。

創立以来21年間もの長きにわたり清水谷高等女学校の校長を務めた大村忠二郎は、成瀬を尊敬し、日本女子大学校の実践をモデルに、生徒の自主性を重んじた学校づくりをしようとした。学術演習会と称する生徒の発表会や、運動会、音楽会、あるいは生徒の自治組織である校友会や、同窓組織である清友会の組織化などが、それに当たるであろう。

大村は、年1度は上京して成瀬を訪ね、女子教育について意見を交換したという。成瀬の方も、大村と親しく交友した。成瀬は創立以来、同校を4度も



大村忠二郎

（『清水谷六十年史』「口絵」）

訪れ、講演した（麻生正蔵も1度）。

また、卒業生で日本女子大学校に入学した者も多く、その一人は「ことに女子大でも其当時清水谷女学校の卒業生といえは何となくかた身がひろい様に感ぜられたものでした。其のかわり母校の名をきずつけまいと（一緒に入学した・片桐）五人はかたくちかいまして随分勉強もいたしました」と記している⁽⁹⁹⁾。

まことに、清水谷高等学校作成の『清水谷百年史』が述べるように、「校地と人との間には日本女子大学校（現日本女子大学）との関係が深いことにおどろかさされる」（10頁）のである。

日本女子大学校の大阪設置を力説していた成瀬が、いわば土壇場になって、東京設置に変更したことは、大阪人の反発を買ったであろうし、成瀬もまた忸怩たるものがあつたであろう。しかし、日本女子大学校と、旧校地に設立された清水谷高等女学校との間に、このような親密な関係が、継続して存在したことは、記憶されるべきものと思われる⁽¹⁰⁰⁾。

注

- (1) 成瀬仁蔵「日記」（1893年11月7日 - 1894年12月12日）（日本女子大学成瀬記念館（以下、成瀬記念館）所蔵）及び『日本女子大学校四拾年史』（以下『四拾年史』。日本女子大学校、1942年）552頁。なお、この「日記」には1893年11月7日にボストンの隣のケンブリッジでW. ジェイムズと面談した記録がある。帰国を前にして、ぜひ会っておきたいと思ったのであろう。
- (2) 『女学雑誌』365号（1894年2月3日）の「片々」欄に「去十四日恙なく帰朝せられたり」とあるが、12月22日にサンフランシスコを出港したにしては日数がかかりすぎていると思われ、真偽は不明である。
- (3) 服部他之助については、娘婿の中島清一郎が編集発行した『自然と生活・附追想録』（桜楓会出版部、1940年）がある。
- (4) 麻生正蔵「愛国憂世の靈的教育家成瀬仁蔵君小傳（下篇）」（『教育』第2巻第5号）『麻生正蔵著作集』（成瀬記念館、1992年）783頁。
- (5) 麻生正蔵・同上（上篇）（『教育』第2巻第4号）同上書、770頁。
- (6) 「明治三十九年一月一日祝賀会ニテ」『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述・実践倫理講話筆記明治三十七・三十八年度ノ部』（成瀬記念館、2009年）185頁。また弘田由己子『成瀬校長と日本女子大学』（1906年執筆、1966年日本女子大学成瀬先生研究会刊）28頁には、帰国直後の成瀬につき「此ニ於テカ肋膜炎ハ再発シ心身意ノ如クナラズ」とある。ちなみに弘田由己子は第1回卒業生（国文学部）で、成瀬校長から実践倫理講義の筆記を依頼されるなど、その信頼が厚かった。『成瀬校長と日本女子大学』の執筆は、成瀬存命中の1906年で、あるいは成瀬自身の命によるものかとも思われる。稿本として残されたものが、のちにガリ版刷りで公刊された。
- (7) 仁科節編『成瀬先生傳』（以下『成瀬先生傳』。桜楓会出版部、1928年）161頁。また『四拾年史』20頁に以下の記述がある。「然し梅花女学校は創立以来既に十六年を経過し、その間自ら抜く可からざる伝統を有し、成瀬先生の教育理想とは相距ること遠いものがあつたので、遽かに是を肯ふ^{うべな}ことをされなかつたが、学校理事者の側に於て先生の教育主義を制肘せぬといふ条件を附したので、先生も或は自己の理想実現の捷徑がここにあるかも知れぬといふ氣を起され、校長たることを承認せられた。」（ルビ・片桐）
- (8) 「歓迎の詞」（墨書）。なお1918年の梅花女学校創立40周年を記念して作成された「梅花女学校沿革の概要」には、「（成瀬）氏を校長となすに与つて最も力を致せしは同窓会諸姉なりき」（ルビ・片桐）とある。両資料とも成瀬記念館所蔵。
- (9) 大森秀子「日本人キリスト教徒によるプロテスタント女学校—女子高等教育へのルート」（キリスト教史学会編『近代日本のキリスト教と女子教育』教文館、2016年）92-94頁。
- (10) 『女学雑誌』第373号（1894年3月31日）「関西女子教育会討議題」、第374号（4月7日）「関西女子教育会討議」、第377号（4月28日）「関西女子教育会畧況」参照。
- (11) 前掲「関西女子教育会討議」。
- (12) 巖本善治は、すでに『女学雑誌』第207号

（1890年4月5日）の「明治女学校生徒に告ぐ、目下の女子教育法」において、明確にこのような主張をしていた。この点については別稿（「成瀬仁蔵と巖本善治—女子高等教育をめぐる相剋—」『愛知教育大学研究報告』第67輯、2019年3月刊行予定）をも参照されたい。なお成瀬は、後述の1894年5月上京時に伊藤博文総理大臣と井上毅文部大臣に相次いで面談した際、宗教と教育との関係について話題にしたことが、前掲「日記」によって確認できる。

- (13) 『女学雑誌』第391号（1894年8月4日）「女子夏季学校」、第395号（9月11日）「第二回女子夏期^(ア)学校科目表」、第397号（9月15日）「第二回女子夏季学校」。
- (14) 大森・前掲論文、94頁。
- (15) 1894年4月14日及び4月29日の成瀬宛て内海忠勝書簡（成瀬記念館所蔵）。なおこれらの書簡から、内海が伊藤博文を紹介したことを窺わせる。また成瀬は、米国留学中に死去した従兄の佐畑信之の家のことについても相談したようである。成瀬にとって同郷の内海は、何でも相談できる心強い先輩だった。成瀬と内海の関係については、『愛知教育大学研究報告』第64輯（2015年）の拙稿「成瀬仁蔵女子高等教育論の原点—長州吉敷の成瀬仁蔵—」でも触れた。なお内海忠勝については高橋文雄『内海忠勝伝』（内海忠勝顕彰会、1966年）参照。
- (16) 前掲「日記」。
- (17) 同上「日記」。成瀬自身も1914年5月の「女子大学創立の由来」（『著作集』第3巻所収）でこの点につき言及している。
- (18) 同上「日記」。なおこの事実は『四拾年史』32頁にも紹介されている。
- (19) 同上「日記」。『成瀬先生傳』や『四拾年史』によると、伊藤博文と面談後、彼の紹介で西園寺公望文部大臣に会ったことになっているが、西園寺が文部大臣に就任したのは1894年10月3日であり、この時会った文部大臣は井上毅のはずである。もっとも後述のように西園寺はこの時期、伊藤の腹心として頭角を現しつつあったから、この上京時に、伊藤

が、女子教育に理解のある、文部大臣就任以前の西園寺を紹介したことは、十分あり得たことである。なお上記「日記」には、文部大臣との面談時の記録として「序文の事＝拝見スル云々」との記事がある。成瀬は、女子教育に関する本の序文を文部大臣に依頼しようとしたのであろう。結果的に、『女子教育』の題辞を、文部大臣就任後の西園寺公望が書いた。

- (20) 前掲「日記」。
- (21) 『梅花学園九十年小史』（梅花学園、1968年）74頁にも引用。
- (22) 日本女子大学成瀬記念館所蔵。なお麻生正蔵は、この校則は自分と成瀬との「合作」であり、「執筆者は私であった」と述べている（麻生正蔵「同志社教育から日本女子大学校教育へ（上）」（『丁酉倫理会倫理講演集』第415輯、1942年5月）前掲『麻生正蔵著作集』836頁）。ちなみに麻生正蔵は1892年1月から9月まで梅花女学校教頭を務めた。
- (23) 『女子教育』の女子大学論については、とりあえず、本誌前号の拙稿「成瀬仁蔵のアメリカ留学と『女子教育』の出版—日本女子大学校創設へ—」参照。
- (24) 校則の印刷本文に「良教師」の語はないが、巻末の正誤表に、この語を補う、とある。
- (25) この件については本誌前号の前掲拙稿参照。
- (26) 前掲『梅花学園九十年小史』77-78頁。
- (27) 1895年6月19日付麻生正蔵宛て成瀬書簡（『著作集』第3巻1040頁）。この書簡で、成瀬は「先日は御苦勞千万難有存候。其後相談の上一昨日活版処へやり明日中ニ出来可申と存候」と記し、かつ麻生に作成依頼した大阪人のみ宛ての文書を「旨趣書ニ添へて与へる事に致度候」と記している。おそらく成瀬記念館に所蔵されている「日本女子大学校設立之趣旨草稿」と題する文書がこれに当たるのではないと思われるが、成瀬記念館作成の『収蔵資料目録1』（2014年）153頁では1896年に作成されたことになっている。
- (28) 『四拾年史』58-59頁。直筆原稿が成瀬記念館に所蔵されているが、前掲『収蔵資料目録1』には掲載されていない。但し3箇所転記ミス

がある。

(29) 『四拾年史』 58-59 頁。

(30) 前掲『麻生正蔵著作集』 836 頁。麻生はさらに次のように述べている。「此の『女子教育』の著述が完成され、将に出版せんとするに際し、君は兩人の合著として公刊すべく、主張された。併し私はそれを拒絶した処、君はその例言中に、私が著述上多大の助力を与へ、特に執筆の勞を執つた事を明記すべく主張されたけれども、之れも亦私は断り、君一人の著述として出版したのである。言ふ迄もなく、此の『女子教育』の内容の骨子も、設立趣旨書及び規則書の要旨もその中心本尊は君であるのみならず、既述せる通り、女子大学設立事業其ものは、君の二十歳前後からの素志念願であつた關係上、女子大学創立の本尊は君であるので、私はその共同設立たるべしとの君の懇願を固辞した以上に、さうするのが当然すぎる程当然であると考えたからであつた」(836-837 頁)。なお、以上の個所は、『著作集』第1巻の「解説」(中寫邦執筆)にも引用されている。

さらに麻生は、成瀬には助力者が必要だったとして、次のようにも述べている。「明治二十二年頃より女子大学創立直後に至る時代の君は米國に遊學せしとは言へ、學識も淺薄狹隘であり、思想の整理發表も下手であつた。口頭發表に於てもであるが、特に筆頭發表に於ては、極めて拙劣であつた。有識者や有力家を訪問して、女子大学設立の賛成を求むる場合に於ても、自己の意見を公衆に向つて、陳述する場合に於ても、思想の發表が支離滅裂であつて、傍に居る私は往々にして、手に冷汗を握ることがあつた位で、之れで果して意志が疎通したであらうかと怪しんだ程であつた」(837 頁)。事実、1898 年 4 月 8 日付の麻生宛て成瀬書簡には、同年 3 月の平安女学院卒業式での演説を『女学雑誌』に掲載するに当たり加筆修正を依頼する箇所があるが、成瀬記念館には麻生の朱筆が入った演説草稿が残されている。なお『成瀬先生傳』の執筆者渡辺英一も次のように述べている。「言葉の方面での先生は、古の教祖預言者と同様に、

筆の人でなく、「舌の人」であつたと言っても差支えない。日記や手紙に於て、先生は随分筆まめであつたが、併し社会的にいふところの文章はあまり書かなかつた。著述でも全然自分だけの筆になつたといふものは英文の外なかつた。」(『成瀬先生傳』 306 頁)

- (31) 1895 年 12 月 30 日麻生正蔵宛て成瀬書簡(『著作集』第1巻、262 頁)。なお青木嵩山堂は、明治から大正にかけて「東の博文館、西の嵩山堂」と言われた代表的総合出版社であつた(鈴木徹造『出版人物辞典』出版ニュース社、1996 年、32 頁)。なお青木育志・青木俊造『青木嵩山堂—明治の総合出版社』(アジア・ユーラシア総合研究所、2017 年)がある。
- (32) 「西園寺文相の教育談」『東京朝日新聞』(1895 年 8 月 4 日)。立命館大学西園寺公望伝編集委員会編『西園寺公望伝』第2巻(岩波書店、1991 年) 210-211 頁にも引用あり。なお、西園寺公望は、創立発起人、創立委員、評議員などを務め、生涯、日本女子大学校を支援した。また娘新子は日本女子大学校に入学した。
- (33) 1895 年 4 月 2 日の生徒向け講演「国力と女子教育との關係を論ず」(『女教一班』(華族女学校、1899 年)所収)。
- (34) 小山静子『良妻賢母という規範』(勁草書房、1991 年) 42-45 頁。
- (35) 「共和国の母 (republican motherhood)」については、拙稿「成瀬仁蔵と「女性の領域 (Woman's Sphere)」—アメリカ留学で学んだこと—」(『愛知教育大学研究報告』第 67 - I 輯(教育科学)、2018 年 3 月)で、不十分ながら閑説した。
- (36) 『女学雑誌』第 420 号(1896 年 3 月 25 日)「新刊書」欄。
- (37) 『女子教育談』(青木嵩山堂、1897 年)巻末の紹介による。
- (38) 『成瀬先生傳』 173 頁。『四拾年史』 29 頁。
- (39) アメリカ留学中の成瀬とエリオットの面談については本誌前号の拙稿参照。なお『教育時論』1108-1110 号(1916 年 1-2 月)に、3 号にわたる成瀬仁蔵訳「エ博士著『大学の管理』抄訳」の連載がある。
- (40) 『成瀬先生傳』 175 頁。

- (41) 『一週一信』（婦人週報社・発行者小橋三四子、1918年）7頁。
- (42) なお成瀬は1898年8月に広岡家の顧問になっている（成瀬仁蔵宛て広岡久右衛門・信五郎書簡（『日本女子大学成瀬記念館所蔵・広岡浅子関連資料目録』2016年所収）参照）。
- (43) この時の三つの質問について、成瀬自ら、1905年3月の卒業式講話（「第二回卒業生に別れを告げ併せて本校の略歴現状の報告を述べ」『著作集』第2巻所収）をはじめ、何度か言及しており、『成瀬先生傳』（176-178頁）や『四拾年史』（30-31頁）にもその紹介がある。
- (44) 『成瀬先生傳』177頁。
- (45) 『日本女子大学校創立事務所日誌』（以下『創立事務所日誌』。「日本女子大学史資料集第一―第三」成瀬記念館、1995 - 1997年）。なお成瀬は、1909年10月26日の伊藤博文暗殺後の国葬の日11月4日に日本女子大学校で故伊藤公爵記念会を開き、「故伊藤公爵を悼み其の生涯を懐ふ」と題する講話をした（『講話筆記』明治四十二年度ノ部（2012年）及び『著作集』第2巻1014頁以下）。
- (46) 『成瀬先生傳』177-178頁。『四拾年史』32-35頁。
- (47) 1896年7月22日付麻生正蔵宛て成瀬書簡に「実は今度梅花女学校を離るゝ、二つについては種々混雑を生じ候へ共万事略々方付申候。之よりハ種々の嫉妬を受る事ある可しと存候。」とある（『著作集』第1巻262頁）。
- (48) 『創立事務所日誌』1896年9月9日の項。
- (49) 「日本女子大学校設立之趣旨」（『著作集』第1巻）229頁。
- (50) 『著作集』第1巻227頁。
- (51) 『著作集』第1巻230頁。
- (52) 『著作集』第1巻231頁。
- (53) 成瀬記念館所蔵の「契約證」には3.755坪とあるが、『四拾年史』59頁には「五千余坪」、『女学雑誌』第443号（1897年6月10日）には「四千坪程」とある。また『清水谷六十年史』（大阪府立清水谷高等学校内六十周年記念事業実行委員会、1961年）17頁所載の資料によれば4686.257坪。9月28日以降買い足したものと考えられる。
- (54) 現在の東京都千代田区永田町2丁目、ザ・キャピトルホテル東急の地。
- (55) この演説は『女学雑誌』第444号（1897年6月25日）にも掲載された。『著作集』第1巻にも収録。
- (56) 『東京朝日新聞』1897年5月28日（第二回）。
- (57) 『創立事務所日誌』1897年5月26日の項。ちなみに成瀬宰平は、住友家15代当主の吉左衛門友純ともいととともに女子大学創設の発起人である。友純は西園寺公望の実弟で住友家の養嗣子となっており、おそらく発起人になったのには西園寺の勧めもあったであろう。住友家の総支配人の地位にあった成瀬は、大阪の財界人代表というべき立場でもあった。
- (58) これら二つの演説は『著作集』第1巻に収録されている。
- (59) なお同じ号の『女学雑誌』の「女学」欄に成瀬の論文「本邦女子高等女子教育の程度」が掲載された。『著作集』第1巻に収録。
- (60) 『福澤論吉全集』第15巻（岩波書店、1961年）647頁。ちなみに左の『全集』に収録されている『時事新報』社説には、福沢が執筆していないものが含まれているとの説があるが、「女子の本位如何」は福沢の執筆と考えてよいであろう。
- (61) 福沢諭吉『女大学評論・新女大学』（時事新報社、1899年11月、『福澤論吉全集』第6巻（岩波書店、1959年）507頁）。同書は、福沢が1899年4月から7月にかけて『時事新報』に発表した女性論を一書にまとめたもの。
- (62) 『創立事務所日誌』によれば成瀬は、翌1898年6月6日、大隈重信の勧めで、大隈の紹介状を持って改めて福沢を訪問した。そしてその後も2度にわたって面談したが、結局、女子大創設の賛助員になることを断られた。しかし成瀬は、福沢が死去した2日後に弔問している。女子大創設への理解は得られなかったが、福沢に対する尊敬の念は変わらなかったものと思われる。
- (63) 中野邦「『女鑑』について」（『女鑑 解説・総目次・索引』大空社、1993年）。
- (64) 磯部香「女子教育者 三輪田真佐子のおける

「家庭」言説の受容—明治期の婦人雑誌『女鑑』を対象とした分析から—(『日本家政学会誌』Vol.59No.10、2008年)

- (65) ただし『女鑑』は中野邦の前掲論文が記すように、1900年代半ばから論調が変化して成瀬の聞き書き原稿を載せるようになる(『新人生観』第14年第10号、1904年9月、『著作集』第2巻所載)。また『女鑑』に女子教育論を長期連載した三輪田真佐子は、開校時の1901年から1910年まで日本女子大学校教授を務めた(漢学及び国文担当)。1902年に、三輪田が設立した三輪田女学校の開校に際し、成瀬が贈った祝詞の原稿が成瀬記念館に所蔵されている(前掲『収蔵資料目録1』129頁)。ちなみに『女子教育』の序文を書いた細川潤次郎は、1894年12月刊行の三輪田真佐子『女子の本文』の序文も書いている。なお三輪田真佐子については磯部香の前掲論文も参照。
- (66) 拾翠「女子大学の設立と宗教(上)(下)」『明教新誌』(1897年6月20日、6月24日)。
- (67) 『女学雑誌』はその後も、第445号(7月10日)、第447号(8月10日)、第450号(9月25日)の各「片々」欄、第452号(10月25日)女学欄「女子高等教育の是非」と、成瀬の女子大学創設運動を支持する記事を掲載した。
- (68) 上記3編の論説は『著作集』に未収録。
- (69) これは10月3日に神戸市で開かれた全国聯合教育会主催の女子教育演説会での演説である。記者による講演筆記が『女子の友』第13号(1897年12月)に載り、これを整理し直したものが『教育時論』に掲載された。なお『著作集』第1巻は『女子の友』のものを収録。
- (70) 『著作集』第3巻1050頁、『四拾年史』52頁。
- (71) 『著作集』第1巻263頁。
- (72) 『著作集』第3巻1052頁。なお同書簡の発信月が10月となっているのは誤り。
- (73) 前掲『自然と生活・附追想録』43頁。
- (74) 『読売新聞』1898年2月12日。ただし菊池大麓は、日本女子大学校の開校式で、東京帝国大学総長として祝辞を述べている。
- (75) この講演は「某女学校の卒業生に告ぐ」と題して『女学雑誌』第464号(1898年4月25日)に掲載された。原稿は成瀬記念館に所蔵されている。
- (76) この講演の原稿も成瀬記念館に所蔵されている。
- (77) 『四拾年史』60-61頁にも引用。なお『創立事務所日誌』1899年5月8日の項によれば、他に稲垣(満次郎、外交官)、肥塚(龍、政治家・前東京府知事)、成瀬、麻生が出席していた。
- (78) 『四拾年史』61頁にも引用。
- (79) 『創立事務所日誌』1899年7月1日から5日の項。
- (80) 洪沢栄一「成瀬君のこと」(『成瀬先生追懐録』桜楓会出版部、1928年、4頁)。とは言え成瀬は、外山正一が亡くなった日の翌日弔問に訪れ、葬儀にも出席している(『創立事務所日誌』1900年3月9日と11日の項)。
- (81) 『創立事務所日誌』1899年9月11日の項に「此夜更に戸川、麻生、羽田三氏成瀬宅に会し合併問題に対してはつまり明朝成瀬澁沢氏との会談成行にまかせんとの事に決せり」とあり、さらに翌12日の項に「午後成瀬氏宅に会合し合併問題に関する澁沢氏の意向に就き成瀬氏より相談あり明日より全力を募金に尽す事に決議せり」とあるのは、成瀬と洪沢の間で、東京女学館との合併をしない方向で合意したことを意味するものと思われる。
- (82) 戸川安宅については日時美穂『油うる日々—明治の文人戸川残花の生き方』芸術新聞社、2015年)が詳しい。なお目時は、「日本女子大学の創立において、残花が果たした役割は知られていない。大学史でも、初代校長である成瀬や、成瀬に乞われて同志社大学から引き抜かれ、女子大学の設立を決めた時から苦難をともし、その意思を受け継いで二代目校長となった麻生正蔵についてはその功績を顕彰するが、創立になってからは一教授にとどまった残花の活躍についてはほとんど語られることはない。」(278-279頁)と述べている。
- (83) 『四拾年史』にも、「三十三年に入つてからは、成瀬先生自身も恐らく東京設置を最善の方法と考へられるに到つたであらう」(64頁)と

- ある。
- (84) 『創立事務所日誌』1899年12月4日の項。また1900年5月1日の項に「佐藤顕理氏、外国行ノ手紙ノ事ヲ謀ル」とあり、さらに12日の項に「佐藤顕理氏ノ名ニテ米国人七名ニ女子大学紹介状ヲ送ル、但シ英文設立（趣）意書ヲ添ユ」とある。なお佐藤顕理は国際ジャーナリスト（『20世紀日本人名事典』日外アソシエーツ、2004年、参照）。
- (85) 『創立事務所日誌』1900年1月1日の項。
- (86) 『創立事務所日誌』1900年2月14日の項。なお『四拾年史』66頁に、これを報ずる『読売新聞』2月16日の記事が引用されている。ちなみに『四拾年史』が6月としているのは2月の誤り。また、これに依拠したと思われる『年表日本女子大学の100年』が、この会合を6月14日などとしているのも誤りである。
- (87) 出席者の浜岡光哲、伊藤徳三、野崎武吉郎はいずれも実業家と政治家。前掲『20世紀日本人名事典』『デジタル版日本人名大辞典＋Plus』（講談社）参照。
- (88) 『創立事務所日誌』1900年5月8日と9日の項。
- (89) 『著作集』第2巻1138頁。『四拾年史』65頁にも同じ引用がある。
- (90) なお『四拾年史』65頁によれば、大阪の発起人の間で、学校位置に関し、①東京説、②大阪説、③東西それぞれ適した学科から着手するの3説があったと言う。しかし③は財政的に無理があるとして取り下げられ、結局①②を採決の結果、①に決したという。
- (91) 『創立事務所日誌』に、高保については「病氣ニ付代人ニ地所ノ事ヲ談ス」、八郎右衛門については「同上」とある。
- (92) 『創立事務所日誌』1900年10月22日の項。
- (93) 『創立事務所日誌』1900年11月1日の項。
- (94) 巖本善治と成瀬仁蔵との関係、及び巖本自身の女子教育観の問題点については、前掲の近刊別稿（『愛知教育大学研究報告』）で論じた。
- (95) 菊池侃二については、国会図書館デジタルコレクションにある木村銀次郎編『近畿名士偉行伝』第1編（光世館、1893年）、奥村梅臯『大阪人物評論』（小谷書店、1903年）、吉本義秋『大阪人物小観』上篇（吉本義秋、1903年）参照。
- (96) 菊池侃二は、北島治房と住友吉左エ門との連名で、1897年5月26日に大阪で初めて開かれた発起人会の招待状発信者となっている。大阪府知事就任前であるが、発起人の中心人物であったわけである。成瀬記念館所蔵の発起人会招待状参照。
- (97) 1900年2月26日開会の臨時大阪府会で菊池知事が説明した「教育十年計画」でこの方針が示された（『大阪府会史』第2編（大阪府内務部、1910年）218-233頁）。なお『新修大阪市史』第6巻（大阪市、1994年）733 - 736頁参照。
- (98) 永井幸次編『女子教育の権化大村忠二郎先生の伝記・併に教え子達の思ひ出集』（1961年）228頁。同書によれば、大村は、菊池の後任大阪府知事・高崎親章に辞表を提出したが慰留された、と言う。ちなみに高崎親章も日本女子大学の創立委員で賛助員であった。なおこの問題に関すると思われる大村忠二郎の成瀬宛て書簡が、成瀬記念館にある。
- (99) 大久保静子（一回生）「そのころ進学した私の考え」（前掲『清水谷六十年史』）57頁。
- (100) 以上の点は、『清水谷百年史』（大阪府立清水谷高等学校100周年記念事業実行委員会、2001年）のほか、前掲『清水谷六十年史』、永井幸次編・前掲書を参照。なお『清水谷百年史』には成瀬仁蔵（及び日本女子大学）と清水谷高等女学校との関係が紹介されて、成瀬の写真も掲載され、『清水谷六十年史』は創立期の清水谷高等女学校について詳しい。また永井幸次編・前掲書には、初代校長大村忠二郎のもとで教員を務めた永井幸次の文章と卒業生の回想記に日本女子大学と清水谷高等女学校との関係が、詳しく述べられている。ちなみに、成瀬記念館には大村忠二郎の成瀬宛て書簡8通が所蔵されている。

[本稿は、2018年4月桜楓会成瀬仁蔵研究会での報告をもとにしたものである。]